

## 6. 京田辺市域の古代瓦

溝口泰久

### 1. はじめに

京田辺市域には、かねてから古代瓦が出土する地点が複数知られている。古代において、瓦葺の建物は基本的に寺院に限られていることから、古代瓦の採集地点は古代寺院遺跡として認知されている。京田辺市では興戸廃寺、三山木廃寺、普賢寺の3カ所が周知されているが、いずれも詳細な発掘調査がおこなわれておらず、その実態は不明である。採集された古代瓦はすでに紹介されているが（鷹野 2010a・b・c）、新知見もあるため、筆者が今回実見できた京田辺市所蔵の興戸廃寺・三山木廃寺の採集資料について、報告をおこなう。また、興戸廃寺の所在が推定される地点における府営の農業試験場建設工事の際に、瓦がまとまって出土しており、その資料紹介も併せておこなう。

なお、本報告において軒瓦は、写真を用いて三次元情報を取得する SfM/MVS によって三次元モデルを作成し、それから出力したオルソ画像で瓦当文様を提示する。使用したカメラは Panasonic DC-GX7MK3 で、レンズは 30mm 単焦点のマクロレンズ SONY ILCE-7M3 を用いた。いずれの個体も、F 値 9、ISO200 の設定で撮影した写真を Agisoft 社 Metashape で解析している。

### 2. 京田辺市内で採集された軒瓦

#### (1) 興戸廃寺（図1）

京田辺市興戸において古代瓦が採集されていることから、古代寺院の存在が認識されている。興戸廃寺には郡家に比定される興戸遺跡が隣接し、推定奈良時代山陽道が傍を通ることが注目され、綴喜郡における中心域に興戸廃寺は位置しているといえる。なお、興戸廃寺において確認されている軒瓦は、今回提示するものがすべてである。

**軒丸瓦** 1は単弁六弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当の中心には十字形の中房を配する。蓮弁は両端がすぼまる楕円形で紡錘形の子葉を配し、間弁はT字状の楔形である。外縁は直立縁である。いわゆる高句麗系の瓦当文様に位置づけられる。側面には瓦当文様の地の面の延長に範端が確認できる。丸瓦取り付け位置は低い。凸面には多量の補強粘土を貼り付け、縦方向に広くナデ調整した後に、瓦当側面に沿って横方向にナデ調整する。凹面側は補強粘土を丸瓦の根元に貼り付け、指頭押圧で丸瓦を固定し丸瓦凹面へ縦方向にナデつける。裏面は、中心がややへこみ周縁は平らに調整されている。独自の文様で年代の比定は難しいが8世紀初頭までにはおさまるものと考えられる。他遺跡に同範例は知られていない。

2は線鋸歯文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当文様は摩滅により詳細には観察できないが、全体的に平面的な文様である。中房は平坦で蓮子が一重にめぐり、弁区の周囲には珠文が

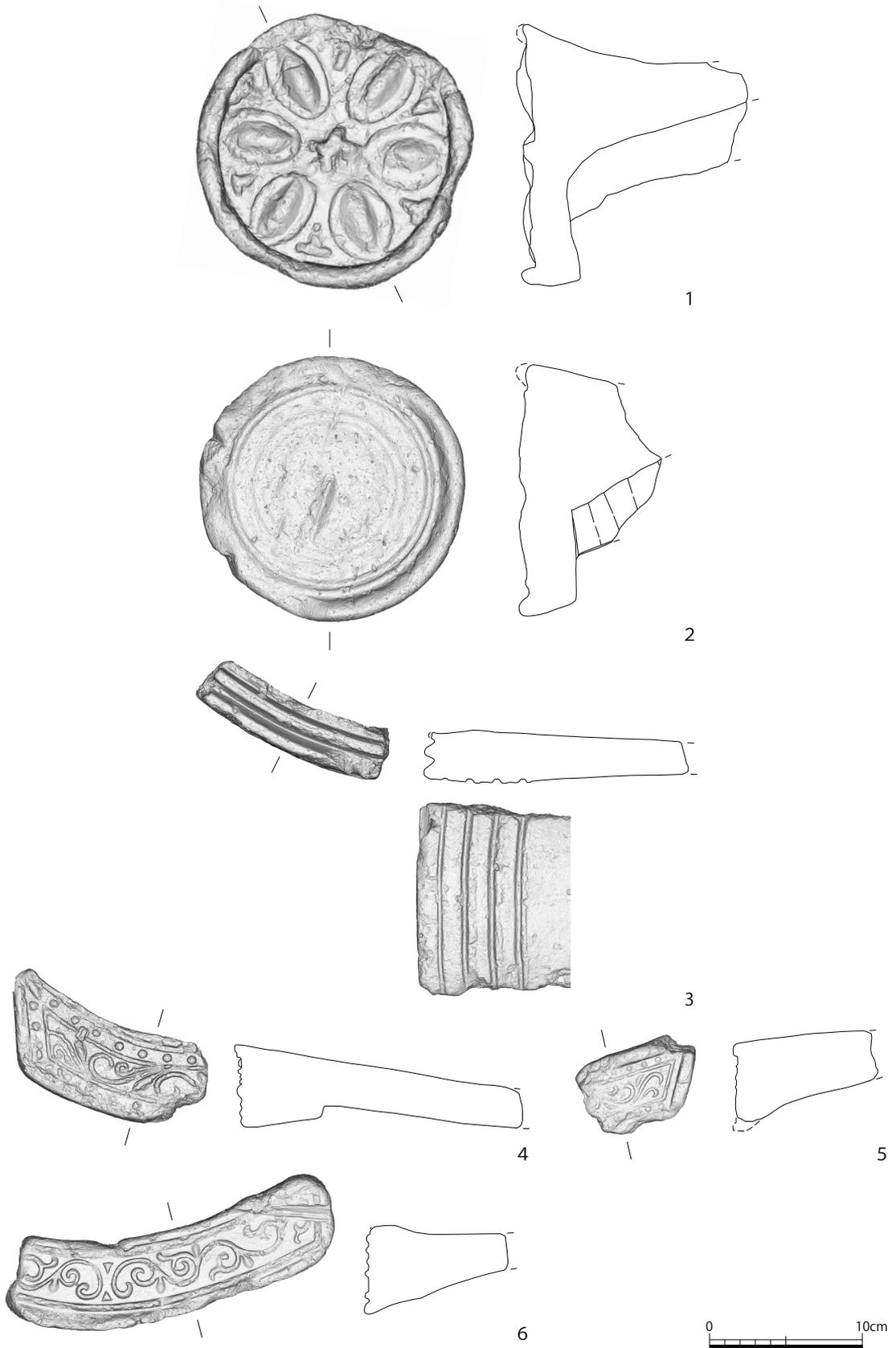


図1 興戸廃寺出土軒瓦 (S=1/4)

配され、外縁は傾斜縁である。おそらく平城宮 6282 B 型式であろう。厚さ約 1.5cm の丸瓦を接合し、凹凸面に多量の粘土をつけ補強する。凹面側の丸瓦に付着した粘土を横方向に削り、台形状の接合線を形成する。裏面の下半部も横方向にケズリ調整している。平城宮 6282 型式特有の製作技法である。南山背では恭仁宮、正道遺跡、高麗寺、蟹満寺、樋ノ口遺跡など、広く同範品が分布することが知られる。奈良時代半ばのものである。

軒平瓦 3 は顎面施文重弧文瓦である。顎形態は直線顎で瓦当側に向かって肥厚する。瓦当文様は型挽きの三重弧文で、弧線の断面形はやや丸みを帯び、上端の弧線は細い。顎面にもおよそ等間隔な 4 本の凹線が型挽きにより施される。残存する平瓦部は平滑に調整され、タタキの種類はわからない。凸面は瓦当側 3cm 程のみに横方向のナデ調整がなされている。こうした顎面施文軒平瓦は南山城を中心に広く分布している。7 世紀後半頃のものである。

4 は均整唐草文軒平瓦である。内区は各单位の主葉に 2 つの支葉が伴う唐草文で、外区には珠文が配される。中心飾りの部分を欠き、断定はできないが平城宮 6664D 型式同範であろう。顎形態は段顎である、凸面には横縄タタキが施され、凹面は全体的に布目を擦り消されている。瓦当文様には範傷複数が看取される。奈良時代前半のものである。

5 も均整唐草文軒平瓦で、細片ではあるが平城宮 6721C 型式とみられる。顎形態は平坦な面を有する曲線顎Ⅱで、摩滅によりその他の調整などはわからない。平城宮 6282B 型式である 2 とセット関係をなす。6721C 型式も南山背に同範品が多く分布する。

6 は均整唐草文軒平瓦だが、中心飾りは三角形が上下に対向し、左右に伸びる唐草は単位が分かれず連続するという特徴的な文様である。顎形態はやや直線的な曲線顎である。側面にも布目が続き、一枚づくりであることがわかる。凸面は縦縄タタキのち全体をナデ調整する。凹面は瓦当側 2 cm 程をケズリ調整する。同範例は南山背においては普賢寺、山背国分寺、高麗寺、井手寺などにあり、近江の甲賀寺（近江国分寺）にも知られる。奈良時代後半～末のものである。

## (2) 三山木麿寺 (図 2)

京田辺市宮津の式内社とされる佐牙神社周辺において古代瓦が採集されていることから、古代寺院遺跡とされ、三山木麿寺として認知されている。三山木麿寺で採集された軒瓦のうち、今回報告するものは採集されている軒瓦の一部で、この他にも多様な種類のものが知られている (鷹野 2010c)。

軒丸瓦 7 は素弁八弁蓮華文軒丸瓦である。中房はやや小さく、1 + 6 の蓮子が配される。蓮弁の先端には短い突線があり、蓮弁の反転が表現されている。間弁は楔形で隣り合う間弁同士が連続している。外縁は直立縁で上面に一条の突線がめぐる。瓦当裏面は不定方向のナデにより調整されている。同範例は普賢寺、燈籠寺麿寺に知られる。7 世紀後半頃のものか。

8・9 は対葉文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、通常の軒丸瓦に比べて瓦当直径が小さく、外縁に一对の対葉文をめぐらすのが非常に特徴的である。

8 は、中心に向かって若干へこむ大きな中房に、1 + 8 + 16 と二重に蓮子をめぐらす。蓮弁は一見単弁に見えるが、間弁により蓮弁が二枚ずつに区切られることから複弁と判断され、間弁は隣接するもの同士で連結する。珠文は密に配されている。外縁は傾斜縁で、一对の対葉文の間隔が広いものと狭いものを交互に配する。側面には瓦当文様の地の面の延長上に範端が

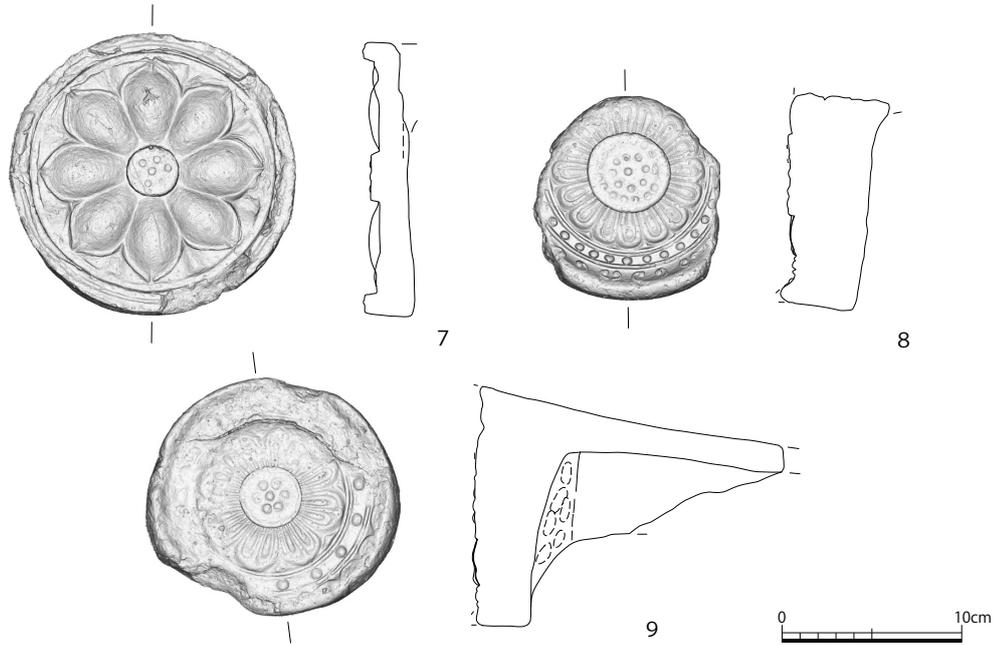


図2 三山木麿寺出土軒瓦 (S=1/4)

確認される。瓦当裏面は指ナデにより平滑に調整されており、瓦当厚が厚い。9は、中房に1+6の蓮子が中央寄りに配され、中房周縁には突帯がめぐる。1枚の蓮弁中に2枚の子葉をもつ複弁である。間弁はそれぞれが連結せず独立している。珠文は8に比べてそれぞれの間隔が広い。外縁は8と同様に対葉文をめぐらした傾斜縁だが、8よりも簡略化され、対になる葉の片方の先端が連結し楕円状になった対葉文を飾る。丸瓦の接合にあたり、丸瓦の凹凸両面側に接合粘土を貼付するが比較的少量である。接合部凹面側を指頭押圧して丸瓦を圧着させている。木津川市伝大仙堂廃寺出土品と同范品とみられるものがある。8は統一新羅の影響を受けつつも、中房に配される二重の蓮子は川原寺式軒丸瓦に連なる特徴をもつ。こうしたところから奈良時代前半を下らない時期に製作されたものと考えられ、8と蓮弁形状は異なるものの同様の外縁を有する9の製作年代も近い時期に位置づけられる。今回図化した資料群の中に軒平瓦はないが、京都国立博物館所蔵の三山木麿寺出土瓦には統一新羅系の唐草文軒平瓦があり、8・9と組み合わせると考えられる。

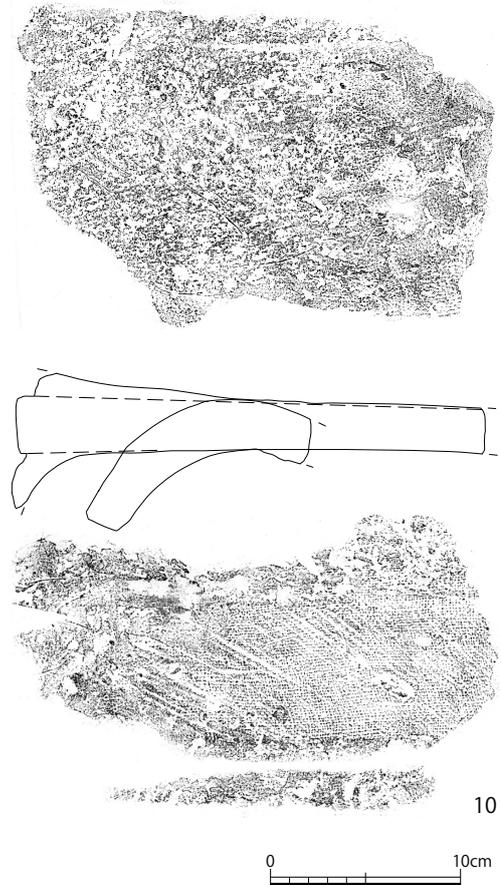


図3 農業試験場出土軒丸瓦体部 (S=1/4)

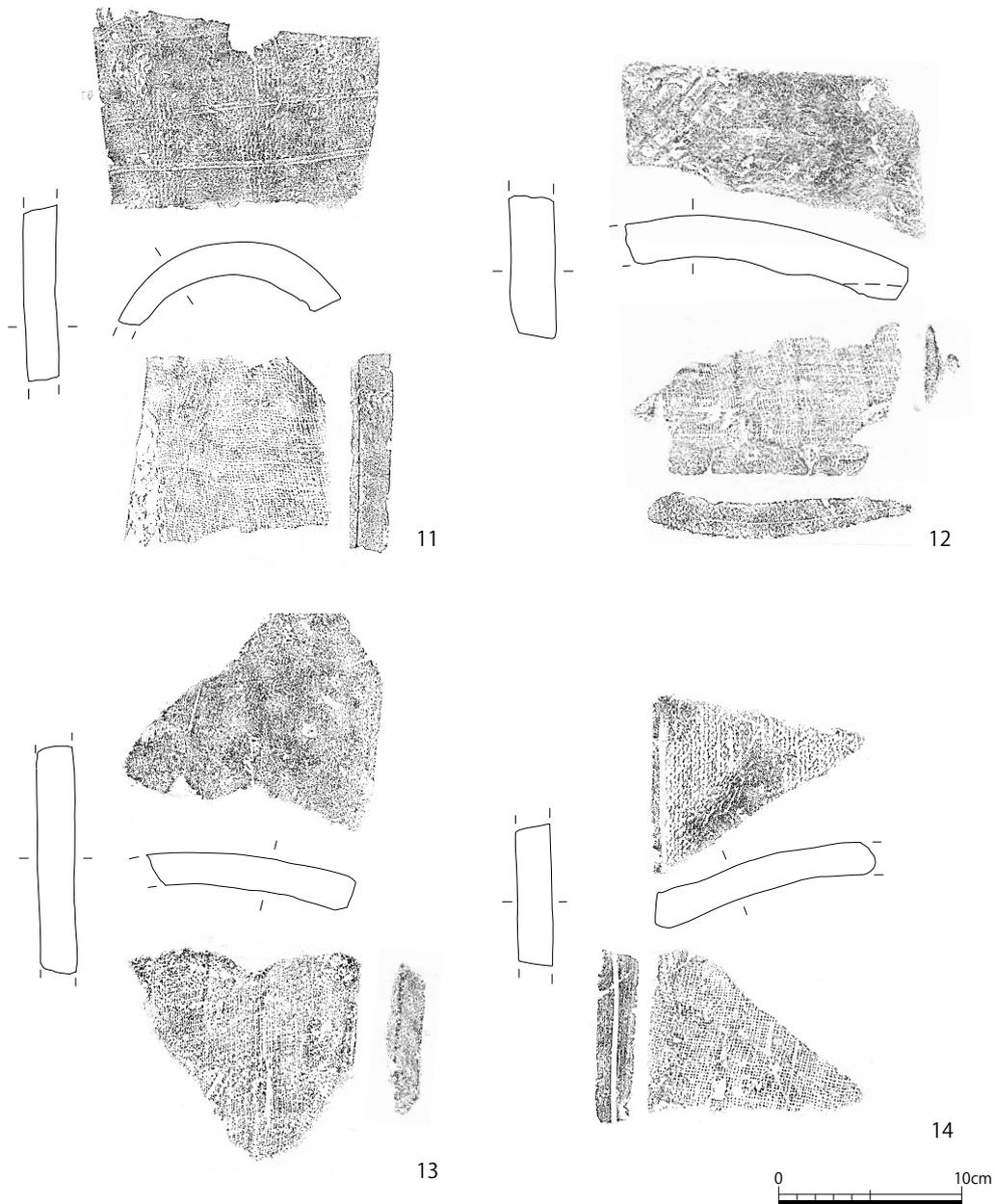


図4 農業試験場出土丸平瓦 (S=1/4)

### 3. 農業試験場から出土した瓦

以下に紹介するのは、農業試験場の建設に伴って出土した瓦である(図3・4)。

10は瓦当の残存していない軒丸瓦の体部である。丸瓦部が良好に残り、凸面は細かい縦縄タタキが擦り消されている。瓦当文様は不明だが、興戸廃寺にて出土している軒丸瓦と比較すると、凸面に多量の接合粘土を接着することから、1と同型式の軒丸瓦の体部の可能性が考えられる。

11は丸瓦である。凸面は細かい縦縄タタキを粗くナデで擦り消している。

12～14は平瓦である。12は桶巻づくり平瓦で、凸面には格子タタキが施されている。13

も桶巻づくり平瓦であるが、凸面は平滑にナデ調整されタタキの痕跡は擦り消されている。14は一枚づくり平瓦である。この個体は凸面の側縁に、凹型台にのせたことで生じる圧痕がみられる。凸型台上で縄タタキを伴う成形がなされたのち凹型台の上で調整されたことがわかる。その他、凹型台を用いない一枚づくり平瓦も確認した。

また、今回は図を提示していないが、6と同範の軒平瓦がこれらの瓦と共に出土している。

#### 4. 興戸廃寺と三山木廃寺の性格

興戸廃寺は採集されている軒瓦が少なく、詳細は依然不明だが、7世紀後半から8世紀代を中心に活動した寺院と考えられる。7世紀の間に供給された可能性がある軒瓦は高句麗系軒丸瓦(図1-1)と顎面施文重弧文軒平瓦(図1-3)である。顎面施文重弧文軒平瓦が南山背で盛行するのに対して高句麗系軒丸瓦は独自色が強く、その性格の違いから同時期に組み合せて供給されたかは不明であるものの、寺院の造営が独自の工房をもちながらも地域に根差した関係性の中で進められていたことが考えられる。一方で8世紀代においては、南山背に広く分布する平城宮6282-6721型式(図1-2・5)や山背国分寺(図1-6)と同範の軒瓦が供給されることから、独自の造瓦組織をもたず、公的な機関からの援助のもとで補修されていたと推測できよう。このような南山背の軒瓦の供給は山背国衙との関連性が指摘されている(上原2006)。9世紀以降の軒瓦は確認されておらず、平安時代には寺院が廃絶していた可能性が高い。

三山木廃寺は、7世紀における創建時の軒丸瓦が普賢寺創建軒丸瓦と同範で、顎面施文軒平瓦を用いる点も互いに共通している。三山木廃寺がその他の京田辺市域の古代寺院と大きく異なるのは、統一新羅系の軒瓦(図2-8・9)が供給される点である。これらの軒丸瓦は奈良時代前半までのものと考えられるが、外縁に対葉文を配し統一新羅の影響が強い。ただし、統一新羅の軒丸瓦は外縁が直立縁であり、傾斜縁の本例とは異なる。傾斜縁に文様を配するという特徴は、川原寺式軒丸瓦以来の、平城宮式軒丸瓦が備える日本的な特徴である。統一新羅の文様を取り入れつつも、範は日本の伝統的な作範技術によって製作されたものと評価できよう。奈良時代には南山城の諸寺院と同様に山背国分寺と同範の軒瓦なども補修瓦として供給されている。三山木廃寺では平安時代後期のものと考えられる軒瓦も確認されているが(梅原1923)、奈良時代末期から平安時代中期頃までの軒瓦が確認されず、寺院の連続性には検討の余地がある。今後の資料の増加によって寺院の実態が明らかになることを期待したい。

#### 参考文献

- 上原真人 2006 「南山城の古代寺院」『京都府埋蔵文化財論集』第5集 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
 梅原末治 1920 「三山木村ノ廃寺」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊 京都府  
 梅原末治 1923 「三山木廃寺(補遺)」『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊 京都府  
 鷹野一太郎 2010a 「興戸廃寺」『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館  
 鷹野一太郎 2010b 「普賢寺」『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館  
 鷹野一太郎 2010c 「三山木廃寺」『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館